



感性を育てる

2月26日に6年生の「こころの劇場」という行事と一緒に参加しました。舞台を通じて生命の大切さ、人を思いやる心、信じあう喜び等、人が生きていくうえで大切なことを語り掛けるプロジェクトです。日本を代表する劇団の一つ、「劇団四季」のみなさんによるステージを見る機会はなかなかありません。今年のパフォーマンスは「カモメに飛ぶことを教えた猫」でした。原作はチリ



の小説家、ルイス・セプルペダによる児童小説で、30年にわたり愛されています。

「カモメに飛ぶことを教えた猫」は、瀕死のカモメから卵を託された猫のゾルバが、彼女と交わした3つの約束を果たすため、仲間と力を合わせて奮闘するというお話です。



「おまえだから愛しているんだ。」自分をカモメではなく猫だと思っているヒナも、周りとの違いを感じ始めます。「カモメでも猫でも関係ない。おまえだからこそ愛しているんだ。」というゾルバの言葉がありました。育ての親としての深い愛情が感じられた言葉でした。

感性とは、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚といった五感を通じて外からの刺激を受け止め、直感的に物事の本質や印象を感じ取る心の動きです。人間特有の豊かな知覚能力と言われています。同じものを見ても、何を感じ、どう表現するのかによって個人の個性が現れます。今回のこころの劇場でも、子どもたち一人一人が感じたものは異なるでしょう。そのような個性や感性を磨くために今回の場面も提供されています。

ただ、最近子どもたちを見ていると、感動する人が減ってきたように感じます。これは本来、五感を伴って育っていくはずの感性が育ち切れていないのではないかと思います。おそらく新型コロナの影響で集まらない、触れない、しゃべらないといった他者との関りの減少が感性の成長に大きく影を落としてきたのではないのでしょうか。

感性も脳がつかさどりますが、脳の発達には手足の微細な動きがとても重要だそうです。握る、つまむなどの手の動作の中でも、裏返すという動きが大切なのだとか。これは本のページをめくる動きです。本を読む、ということは内容に心を動かすだけでなく、手の動きによって脳の発達にもいい影響があるということです。



5歳くらいまでに絵本を読んで、裏返しの動きをたくさん経験した子もいるでしょう。しかし、それから次第にスマホやタブレットなど横滑りの単純な動きに戻ってしまいます。感性の未成熟は行動に表れます。未成熟なままでは、自分の行動を相手がどう考えているのかを理解することが難しいのです。スマホやタブレットは生活に必要なツールの一つではありますが、それだけに振り回されず、五感を働かせることのできる、直接的なかわりも大切にしていく必要があると思います。デジタルとアナログのハイブリッド化がこれから大切になるのではないのでしょうか。

